

2009/06/06 [論点] 台頭する中国 日米同盟へ七つの提案 リチャード・ブッシュ (寄稿) 解説面

5月25日の北朝鮮による核実験への対応で、日米同盟は、中国と協力するメカニズムとしての機能を果たしていると思う。冷戦後の同盟が何をなすべきかを巡っては、従来と異なる新たな安全保障問題や「共通の価値観」に注目が集まっているが、最も重要な目的 戦略目標は中国の台頭への対応であると、私は信じている。

中国は、急速な経済成長や北朝鮮問題での貢献などによって、日米双方に恩恵をもたらしてきた。一方で、東京とワシントンはともに、北京の政治、軍事面での影響力増大を懸念している。両国内には少数派ではあるが、「中国封じ込め」を好む人もいるほどだ。そうした政策は中国側の敵対心をあおるだけなので私は賛同しないが、中国の台頭に注目するのは適切なことだ。日米が中国との間で、今後どのような相互関係を築くかが、北東アジアの未来の戦略地図のカギを握ることになるからだ。

日米と中国の間で相互不信の悪循環が生じる例として、二通りの懸念すべき事態が想定される。一つは、軍拡競争である。中国は日米同盟の強化を理由に軍拡を続け、日米は、それを恐れて軍事面での備えを増強する。危険なのは、相手に対する恐怖心に基づいて双方が行動することだ。

二つ目は、中国が、日米それぞれの個別的な国益、権益がかかわる問題を扱う場合だ。台湾、北朝鮮、東シナ海問題などでは、日米と中国の双方が相手側の意図を否定的にみて行動する恐れがある。

中国には、「一つの山にトラは二頭住めない」という格言がある。日、米、中にとっての課題は、トラたちが同じ山に同居できるような環境を作れるかどうかだ。具体的には、3か国が勢力争いを避けて協力し、共存する環境である。

悪循環を避け、前向きな環境を醸成するために、日本と米国の双方に次の7項目を提案したい。

1 日米は、中国の台頭の本質に関し、明確な理解を共有するべきだ。必要なのは、甘すぎず、過剰に警戒もしない評価だ。国際社会における中国の積極的な役割についても見解を共有するべきだ。

2 中国が、日米の意図について否定的に解釈した場合はそろって反論するべきだ。なぜなら北京の行動方針は、日米に対する認識に基づいて形成されるからである。

3 日米は、2国間、地域、グローバルな舞台で、中国と積極的にかかわ

る機会を作るべきだ。

4 日米は、3か国に非建設的な結論をもたらす問題についての解決に力を注ぐべきだ。解決できない場合、3か国は相互協議のメカニズムを構築する必要がある。

5 日米は、中国という国の虚と実について、それぞれの国民を教育、啓発するべきだ。

6 日米は、こうした戦略的使命を遂行する能力、人材を各自、そして共同で確立するべきだ。

7 日米は中国と、政府レベルの常設の3か国協議の場を創設するべきだ。特に、中国の軍部と協議のパイプを作る必要がある。中国の体制内で日米の意図を最も警戒しているのは、軍部だからだ。

以上列挙した点は、中国側も役割を果たす必要がある。中国は日米の行動に正しい見解を持ち、適切に反応し、好ましい世論を形成する必要がある。中国の台頭への対応は、日米同盟の使命であり、そのための能力、意志、技術を培うことが同盟の仕事となる。

リチャード・ブッシュ 米ブルッキングス研究所北東アジア政策研究センター所長。米現政権に中国政策で助言。

写真 = リチャード・ブッシュ氏